

だから俺は剣士になっ
た(仮)

ナストマト

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

日常を襲うモンスターたちから人々を守っている剣士たちがいた。人知れず戦う彼らの争いに、一人の青年が巻き込まれる。青年の前に現れたのは、一人の少女。そんな出会いから、青年の物語は始まる。

処女作です。

皆さんの素晴らしい作品を読んでいたら、つい衝動的に書いてしまいました。どうか温かく読んでくれるれば幸いです。

目次

プログラグ

1

プロローグ

いきなりだが、例えばの話をしようか

たとえば、朝起きたら知らない天井が目の前にあつたらどうする？

混乱してしまつて、まともな思考なんか出来やしないだろう。俺ならつていう話だが

たとえば、横断歩道を歩いていたら、トレーラーが突っ込んできたらどうする？

俺なら、まずビビつて動けないだろうな

急にこんな話をしてしまつて悪いな

さて、では

たとえば

ドラゴンとしか言えないような

10階建てのビル程の高さはあろうかというモンスター化け物が、今にも自分を喰らわんと目の前に現れたらどうする？

しかも、普通に、街中に

結論

ビビる

動けない

混乱

もう何が言いたいかわかるよな

俺の目の前には、そんな奴がいる

「うわああああああ!!」

叫びながら逃げ惑う人々

前述した通り、ここは街中だ。しかも、けっこうな都会である。人が行き交うような

場所である。

俺か？

もちろん未だに混乱中だ。声すら上がらない

奴は急に現れた。空から急に

それを理解しろって言われても、俺には無理な話だ

奴が動き出した。逃げる人々に目を向けたかと思うと、口から炎を吐き出した。フアンタジーの世界みたいだな、リアルでの出来事だが

炎は凄まじい勢いで人々を襲い、逃げきれなかった者は炎の餌食となっていく

人の焼けた匂いが鼻に付く

さらに奴は、大きな尻尾や手足を振るい、建物を破壊する。崩れゆく建物の下敷きになっっていく人々

焼かれていく人々

下敷きになり、潰れていく人々

まるで地獄のような光景を

俺は呆然と眺めていた

そして、ついに奴が俺を見た

微笑んだような気がした

おもちゃを見つけた子供のように
獲物を見つけた狩人のように

圧倒的な威圧感

逃げられない

逃げられるわけがない

奴は俺に近づく。一步一步。動きは遅いが、確かに自分に近づいていた

大きな足音は、まるで俺への鎮魂歌のように聞こえた

ついに目の前まで来た

俺は奴の目から目が離せない

動けない

大きな口をあけて近づいてくる

笑いがこみ上げてくる

人は本当に恐怖すると笑うってあったが

あれって本当だったんだな

いい勉強になった

もうおしまいだな

死ぬことを意識した

目を閉じる

聞こえる金属音

いつまでたっても来ない感触

目を開き見ると、奴は眉間に大きな切り傷を負い、血を流していた
そして、俺の前に立つ何者か

「大丈夫ですか？」

その人はこちらに振り向いてそう言った

顔を見て息を呑んだ

胸が高鳴る

奴を切り裂いたと思われる人は
確かな美貌を持つ少女であった

彼女は整った顔立ちであり

綺麗なロングの黒髪

身長は160cmくらいだろうか

ラノベなら間違いなくヒロインだな

格好はSAOのアスナのような服装をしていた
しかし、持っている武器はレイピアではなく剣

「危ないから避難して！」

言われて俺は今の状況を思い出した

彼女の剣についている血を見ると、やはり彼女が奴に切り込んだようだ

ここは彼女に任せる方が良いと判断した

というより、自分にできることなんてなかった

二つ返事で了解し、その場を離れようとしたが、奴が炎を吐き出し俺の行く手を遮った。どうやら俺を逃がすつもりはないらしい

熱つついな、こんちきしょー

「……仕方ないか、出来るだけ早く終わらせるから、自分で身を守って」

これまた二つ返事で了解。弱い俺

彼女は、奴に向き直るといきなり姿を消した、と思うと、奴がうめき声をあげた。いつの間にか彼女が奴の後ろにいる

え、なに、いま何したん？

すぐさま姿を消す彼女。現れては消える攻撃（だよな？）を繰り返す度に、奴はうめ

き声をあげる。姿は見えないが、確かに奴に傷が刻まれていく

奴も負けじと炎を吐き散らす。しかし、彼女は背中に飛び移り躲し、そのまま背中に剣を突き立てた

て、うおっ！

炎がこつち来た！

俺はあたりにある建物の残骸の陰に隠れ、なんとかやり過ごす

あつぶねー、てか軽く服が焦げてるんだが

ズシーンと音がした。見れば奴が地に伏していた。あつけないな、いや、彼女が強いのか

と、奴の体が発光し始めた。なんだ、あれか、最後の爆発とかいうやつか。ヤバイな、こつちまで来ないだろうな

しかし、爆発などはせず、奴から玉のような物が四散していた。なんていうか、ゲームで死んだあとにポワーンてなるような物が。そして本体は薄れていき、そのまま消えていった

終わったのか、と意識すると疲れがどつと出てくる。アドレナリンって凄いな

彼女がこちらに歩み寄って来た。

「ええと、大丈夫だった？」

と聞いてきたので

「だ、大丈夫だ、問題ない」

咄嗟にそんなことを言ってしまった

いや、大丈夫じゃないけど。擦り傷とか火傷とかめっちゃしてるけど。なに言ってる俺

「フルメタ？私も好きなんだ」

知ってるのかよ。しかも、イーノックじゃなくてフルメタを選ぶあたり、お友達になれそうだな。それとも知らないだけか。

「まあ大丈夫だよ、たいした傷もないし」

よかつたと安堵する彼女。その姿に思わずドキツとしてしまう

「じゃあ、もう行かないと」

と言つて、彼女は立ち去ろうとする。お、おい。

「ちよつと待つてくれ！」

彼女を引き止める。どうしても聞いておきたいことがある

「君は何者なんだ？」

簡単なセリフになつてしまつたが、これしか言い様がない。

急に俺の前に現れたことといい、消えるような速さをもつたり、奴のことも知つてい
るような感じだつた。これを普通の人と捉えるには無理がありすぎる。だからこそ聞

いておきたかった。

「平和を守るヒーローってところさ」

声は俺の後ろから聞こえた。見ると、如何にも將軍と言う容貌の、ヒゲをはやした厳つい顔の男性がいた。でかい、2mはあるな。鎧を纏うその姿は、歴戦の勇士というに相応しかった

「今みたいに、一般には知られていない生命体から、お前たちを守る。それが俺たちの役割だ」

ヒーロー、HERO、そういえばフランス語ってHを発音しないらしいね。どうでもいいね。

その言葉は確かに自分の胸を打った。ヒーローか。確かに俺らを救ったその姿はヒーローそのものだった。

憧れるに決まってるだろ

「俺も、ヒーローになれるか？」

男に問う。守られるばかりはゴメンだ。だったら俺は守る側になる。將軍はニヤリと笑った。

「それはお前しだいだ」

ですよね。知ってたよ、わかってた。そりやそうだ、絶対なれるとか言ったところで、本人が何もしなければなれる訳が無い。なら、頑張ってみるさ

「俺も連れていってくれ」

「いいだろう」

早いな、もう少し考えるかと思ったのに。いいのかそれで。

「目を見ればわかるさ。いい目をしている。決意に染まっていたいい目だ」

決意か、そうだな、これは決意。決まった意思じゃない、俺が、俺自身が決めた意思だ

「では行くか」

男が声をかける。俺は彼女と目を合わせる。彼女は優しく微笑み、頷いた。

これからどうなるかはわからないが、目指すものは決まった。ヒーロー、いいじゃないかヒーロー。なってやろうじゃないか

そう、俺の物語は始まったばかりだ

別に終わらんよ？

完とかじやないからな？